『死刑囚 永山則夫の花嫁』刊行記念インタビュー

本書の編者・嵯峨仁朗さんに聞きました。記者として永山事件を３０年以上取材しつづけてきました。

永山事件を 30 年以上取材してきた嵯峨仁朗さん。本書では事件の概要や二人の生い立ち等を執筆。

本書を出したきっかけ

編集部（以下「編」） まず、この本を出版するにあたっての経緯から教えていただけますか？　永山則夫氏（以下「永山」）と新垣和美さん（以下「ミミさん」）の手紙を保管されていたということですよね。

嵯峨仁朗氏（以下「嵯峨」） はい。取材の過程でミミさんを含めて関係者と交流するなかで、こういう手紙があるとお聞きしました。

当時もう永山は死刑執行されたあとでしたが、関係者が手紙を処分すると聞いて、「残しておくべきだ」と言ったら、私が保管することになったんです。そのときは出版なんてまったく頭になく、貴重なものだからとずっとそのまま保管していました。そして今回、柏艪舎の山本代表と編集の可知さんと雑談している時になぜかこの手紙の話になり、興味深いからぜひ本にしたいというお話をいただきました。

編　最初は戸惑われましたか？

嵯峨　というより、たぶんあんまり売れる本にはならないで迷惑をかけるからとお断りしました（笑）。

しかし話のなかで、来年（二〇一七年）が死刑執行から二十年になると聞いて、やっぱりこの節目に何かを残しておく必要があるんじゃないかと。

僕にとっては永山の問題は現在進行形でもあるけれども、あれから二十年も経過した今の世代、次の世代の人たちにどう伝えていくか、何か形として残しておくべきじゃないかと思うようになりました。

編　私たち四十代くらいだと永山則夫の名前を知っているのがやっとです。十代りたてだから意欲はあるけれども、校閲なので取材はできない。

ちょうど差し戻しの裁判が始まるというときだったんです。この裁判はまだ続いていたんだなと、意外な感じがしたことを覚えています。それから裁判所に通いはじめたんです。

編　裁判所に行かれたのは仕事というよりは、自分なりの取材だったと。

嵯峨　自分なりのテーマで取材してみようという気持ちが半分と、勉強のつもりで行ったのが始まりでしょうか。それまでも自分なりに事件の概要を調べたりはしていました。

ただ、具体的にどういうふうに記事にするのかといったことはその頃は全然ありませんでした。

編　永山と直接話すことはまだなかったんですね。

嵯峨　傍聴に来ていたのは

死刑執行から二十年――。この節目に何かを残しておく必要がある。

に行ったんです。

そのときに初めて話した感じは、大学の先生のような印象でした。髭を生やしていて。

編　残っている写真を見ても、爽やかな青年という感じですよね。

嵯峨　そうそう。大学の講師、助教授が学生にゆっくり教え諭すような雰囲気の話し方でした。

編　そうなんですね。

嵯峨　何回か会っているうちに、新作、『ソオ連の旅芸人』だったかな、それを出したいのになかなか出版元が見つからないから、自分たちで出版社を作るんだという話をしていて、嵯峨さんも出資してくれないかと。

編　出資ですか！

嵯峨　十万円くらいお願いできないかって言われたんですけど、「新人なんで一ヶ月分の給料です」って話をしたら、苦笑していました。

当時彼は日記をつけていたんですが、そのことも書いていましたね。「出資をお願いしたら、それはひと月分の給料だと言われた」と。

編　日記もご覧になっているんですね。

嵯峨　『いのちのギャラリー』に保管してあります。それによると、向こう（永山）から見た僕の印象は、背の高い爽やかな青年、だったかな。嘘じゃないですよ（笑）。僕も特別背が高いわけではないんですが、彼は一六〇ちょっとですからそう見えたんでしょう。

の青年が連続射殺事件を起こすというのは、かなり衝撃的な事件ですよね。

嵯峨　そうですね。銃による連続射殺はめったにないことですし、しかも犯人が十九歳でしたから、衝撃的な事件だったと思います。

永山則夫との出会い

編　嵯峨さんがこの事件を最初に取材されたときは、まだ記者として新人だったんですか？

嵯峨　入社一年くらいですかね。最初は校閲を一年やるということになっていて、その頃でした。まだな

関係者、支援者が多かったので、終わったあとにみんなで連れ立って弁護士会館の喫茶店に行って、お茶を飲んで話をする。時間があれば、担当弁護士が顔を出して、今日の裁判の話をしたり。

そのなかでいつの間にか僕も一緒に入っていて、取材を始めたというのがきっかけです。

編　永山に初めて会ったときの印象はいかがでしたか？

嵯峨　当時、東京拘置所では必ず面会目的を書かされますが、取材目的だと拒否されるので、支援者と一緒

元妻、ミミさんについて

編　ミミさんとお会いしたのは？

嵯峨　二人の記憶が違うところがあるんですけど、ミミさんはその頃、永山との離婚の危機が迫っていて、あんまり傍聴には行かなかったと話しているんです。

でも僕の記憶では何回か傍聴で会っていますね。ただ、僕はそのとき彼女のことを永山の妻だと知らなくて、支援団体の人かなと思っていたんです。

編　なるほど。

嵯峨　スマートな格好をしていて、垢抜けたファッションというんですかね。女性としては身長も高くてすらりとしていて。僕はてっきり弁護士の助手なのかなと思っていたんです。

帰るときに一緒になって、「あなたはどうしてこういうことをしてるの」と訊かれて、個人的な関心で、実は新聞社に勤めているんだと。そしたら、ミミさんは驚いて。

編　記者に見えなかったんですね。

嵯峨　彼女に「私は永山の妻なの」と言われて、逆にこっちのほうが驚いて。

編　そっちのほうがびっくりですよね。では、ミミさんと永山の結婚前の手紙のやり取りを読まれたのはそのあとだったんですね。

嵯峨　そうです。

二人の手紙の印象について

編　最初の頃の手紙は、普通の恋人同士の楽しそうな会話です。とても死刑囚とのやり取りとは思えないような。

嵯峨　ミミさんからの一通目はかなり遠慮しがちなんですけど、だんだん彼女らしく人の胸に飛び込んでいく、一気に入り込んでいく

ような手紙ですね。永山のほうがそのペースに引き込まれていったような感じがあります。急にぐっと距離が近づいたような。

編　ミミさんの魅力に一気に引き込まれているのがわかります。永山の元には他にも様々な方から手紙が届きますよね。そのなかでこんなに続くのは、やっぱりミミさんだったから。

嵯峨　基本的に永山はかなり筆まめで、面会に来てくれた人には必ずハガキや手紙を出しています。でも形式的・事務的なものが多い。冷ややかに突き放すものとか。こういう感じでくだけているというか、冗談を言ったりしているのは、たぶんこの（ミミさんとの）手紙だけだと思います。

編　それは生い立ちが似ていることもあるんでしょうか。

嵯峨　ミミさんの出生などを知っていくのは、そのあとだったと思います。彼女が日本に来て、具体的に話していくなかで、やっとわかってきたことですね。

たぶん手紙で知る限りとはいえ、彼のなかでも今まで会ってきた人とは違う、いい意味での異質性があったんだと思います。そこに惹かれたんじゃないかな。

それはアメリカに住んでいたという文化の違いなのかもしれないし、手紙から感じられるものかもしれない。いままで接触してきた人は理屈やあるいは支援が根底にあるんですけど、彼女にはそういうものがない。

ストレートに心に入ってくる。そういうなかで、永山も自分でも気づかなかった側面を出してきたんだと思います。

編　永山自身にとっても、そういう自分が驚きでもあったんでしょうね。

嵯峨　そうだと思います。

ときどき手紙でもそういう部分が垣間見られます。「自分がこんな気持ちになるんだ」ということも書いてますから。

編　ミミさんの純粋性は、どこから来るんでしょう？生まれ持ったものですかね。

嵯峨　うーん。天性のものがあるんじゃないですかね。

編　すごく苦労されているのに、そういう精神を失わないのは強さを持ち合わせた方なのかなと思いました。

嵯峨　いろんなことがあっても変わらない強さはあったと思います。柔らかい心というか、柔軟さもあったと思うんです。

とはいえ、離婚直後くらい、精神的に落ち込んだときなどは病気に近い状態だったでしょう。ですから、必ずしもいつも心が強いとか、そういうことではないでしょうね。そういう意味では、不思議な力がある方だと、僕以外にも取材をした方たちは仰っています。

二人が起こした奇跡

編　本書のサブタイトル「奇跡を生んだ４６１通の往復書簡」とありますが、この二人のあいだに生まれた奇跡とはどういうものだったと思われますか？

嵯峨　奇跡は、二人の関係ということもありますし、何より四人を殺している人間に、しかも一回死刑判決が出ているのに無期懲役の判決が出るという、これも一つの奇跡だと思います。

もちろん司法的な判断としては合理的な理由があったと思いますが、ミミさんの存在は大きかったと思います。ミミさんが証人として出てくる。そして、永山自身も大きく変わっていっ